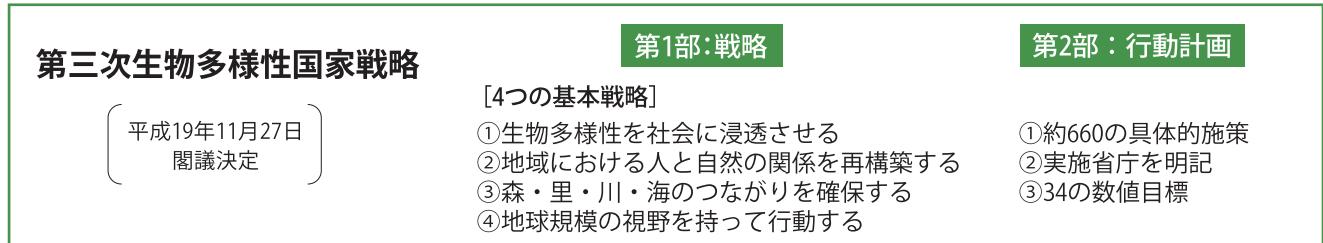


2. 行政の体系

2.1 自然環境保全制度の概要

<国家戦略>

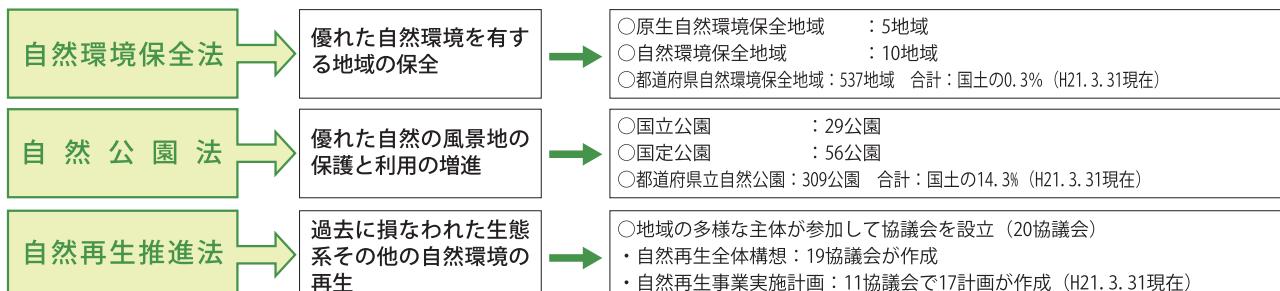


<法制度>

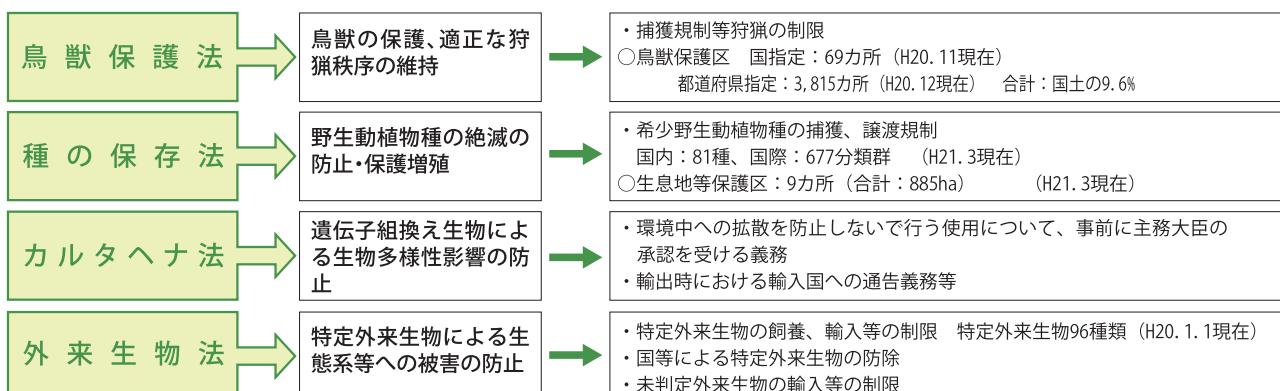
生物多様性の保全及び持続可能な利用



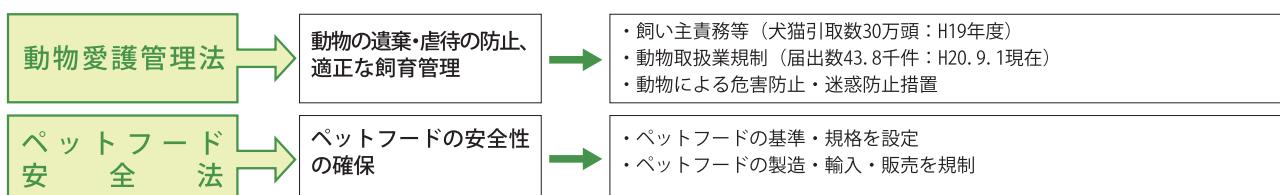
生態系の保全・再生



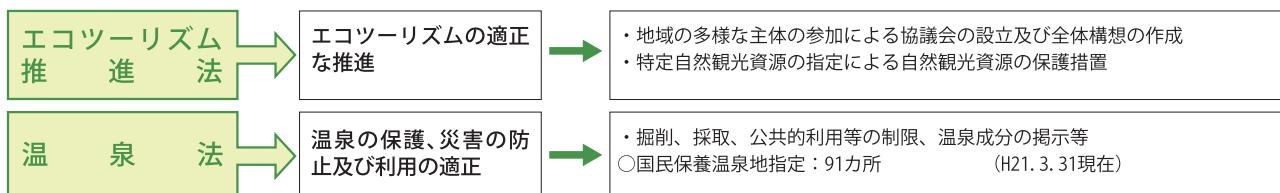
野生生物の保護



飼養動物の愛護・管理等



自然とのふれあい



2.2 第三次生物多様性国家戦略

生物多様性国家戦略は、生物多様性条約第6条に基づき、生物多様性の保全と持続可能な利用に関わる国の施策の目標と取組の方向を定めたものです。

国内外の状況の変化などを受けて、平成18年度に生物

多様性国家戦略の見直しに着手し、生物多様性国家戦略の見直しに関する論点を取りまとめました。それらの結果を受け、平成19年11月、第三次生物多様性国家戦略を閣議決定しました。

— 人と自然が共生する「いきものにぎわいの国づくり」を目指して —

第1部：戦略

【生物多様性の重要性】

- いのちと暮らしを支える生物多様性
- ①すべての生命の存立基盤
- ②将来を含む有用な価値
- ③豊かな文化の根幹
- ④暮らしの安全性

【3つの危機】

- 第1の危機…開発や乱獲による種の減少・絶滅、生息・生育地の減少
- 第2の危機…里地里山などの手入れ不足による自然の質の変化
- 第3の危機…外来種などの持ち込みによる生態系の擾乱

地球温暖化による危機 — 逃れられない深刻な問題 —

- ・多くの種の絶滅や生態系の崩壊

【長期的な視点】

100年先を見据えたグランドデザイン

- ・生物多様性から見た国土のグランドデザインを、国土の生態系を100年かけて回復する「100年計画」として提示

【多様な主体の参画】

地方・民間の参画

- ・地域での活動に結びつけるため、地方や企業による取組の必要性を強調

4つの基本戦略

I 生物多様性を社会に浸透させる

- ①「いきものにぎわいプロジェクト」の展開
- ②放課後の自然体験学習や農山漁村宿泊体験

III 森・里・川・海のつながりを確保する

- ①国土レベルの生態系ネットワークの具現化
- ②「国立・国定公園の総点検」と自然再生の推進
- ③漁業と両立する海域保護区のあり方検討

II 地域における人と自然の関係を再構築する

- ①「未来に引き継ぎたい里地里山」の調査・支援と多様な主体による共有資源としての管理モデル構築(エコツーリズムやバイオマス)
- ②鳥獣とすみ分けられる地域づくり
- ③希少動植物の生息できる空間づくりと外来種の防除

IV 地球規模の視野を持って行動する

- ①わが国の「生物多様性総合評価」の実施
- ②自然共生モデルの世界への発信(SATOYAMAイニシアティブ)
- ③生物多様性の観点からの温暖化の緩和策と適応策検討(森林・湿原の保全、生態系ネットワークの形成など)

第2部：行動計画

・約660の具体的施策

・実施省を明記

・34の数値目標

生物多様性国家戦略のHP(生物多様性センター内) : <http://www.biodic.go.jp/nbsap.html>

生物多様性とその恵みとは

生物多様性条約では、生物多様性を「すべての生物の間に違いがあること」と定義しており、生態系(干潟、森林、河川などいろいろなタイプの自然があること)、種(ヒグマ、トンボ、ブナ、タンポポなどの動植物や細菌などの微生物など様々な生物がいること)、遺伝子(アサリの貝殻の模様が千差万別なことなど、同じ種でも多様な個性があること)の3つ

のレベルでの多様性があるとしています。地球上の生きものは、それぞれに個性を持ち、それらが森から海まで、そして、食う・食われる、花粉を運ぶといった様々な関係でつながっています。生物多様性は、私たちの生活に、食料や水の提供、精神的、教育的価値の付加、気候調節や水質浄化等、生態系サービスと呼ばれる多くの恵みをもたらしています。